

「牟礼神社」

ケヤキの巨木と算額

由来によれば、牟礼神社は中世の戦国時代のころ、矢筒城主島津氏の鎮守として西暦1100年ごろから別の場所に祀られていて、二度も兵火によって焼失と再建を繰り返したようです。江戸時代に入って徳川幕府により街道が整備されると、慶長年間（1596～1615）には新しく牟礼の宿場が置かれました。そして、それまで矢筒山南方の表町地籍に住んでいた人たちのほとんどが牟礼宿に移転したのに合わせ、慶安4年（1651）に神社も宿場の中心に近い現在地に移転したとされています¹⁰⁾。

境内にある一番大きなケヤキはこの神社のシンボルです。目通りの胴周りが5.49メートルあり、神社が現在地に建てられたころに植えられたものだとすれば、350年以上の樹齢を持つことになります。また、これとは別に胴周りが3.81メートルのケヤキもありましたが、こちらは平成19年（2007）7月の新潟県中越沖地震の際、地震の5日後に突然倒れてしまいました^{注)}。このほかに境内に目立つ巨木としては、ケヤキが4本、イチョウが1本、杉1本があります。

牟礼神社祝詞殿には算額が奉納されています。算額というのは、数学の問題が書かれたもので、神社仏閣に奉納された絵馬の一種です。約350年前の寛文のころよりあらわれたもので、日本独特の習慣といわれています。奉納の動機は、神仏の加護のおかげで難問が解けたとして、その問題を絵馬にして納めたり、自分の研究成果を同好者に知らせる機会として納めたりし